



日本威人傳

Vol.1 立川談志

この人、上手な落語家になりたかったわけではない。ただ「偉い人」になりたかっただけ。結局、どちらにもなれなかったが。

死んでからにわかに評判が良くなり、「風雲児」やら「談志の芝浜は最高！」とか言われるようになった。風雲児なのはある意味で当たっている。詳しくは Wiki あたりで「落語協会分裂」か何かで調べてください。

しかし芝浜は、単に「談志の芝浜」であって特に巧くもない。噺の巧拙でいえば、関東の真打で芝浜を演じる人の半分以上が談志より巧い。談志だけ聴いて「最高！」と決める前に他の噺家も聴いていただきたい。たとえば五街道雲助を聴けば、どっちが素晴らしいかわかる。

この噺は絶対に談志でなくては！という演目も無い。敢えて言えば鉄拐あたりか。談志の言うイリュージョン落語で声と演出がハマっているように思われる。つまり、このような大袈裟でドンチャンやる噺には向いているが、芝浜が属する世話噺・人情噺はまるでだめ。

談志は決してへたな落語家ではなかった。柳家小さん門下で小ゑんを名乗っていた時分から談志に改名する辺りまでの彼はリズムも良く、声も聞きやすく、聴いていて違和感無く、最高の若手とは言えない（志ん朝はもっと上だったので）までも、木戸銭を払っても損はなかった。

いつからダメになったのかは明確だ。重なった悪行の報いで落語協会にいられなくなり、小さんに破門されて独立、落語立川流という組織を作って自ら「家元」に収まったときからだ。なお、〇〇流やら家元という名称・呼称は従来の落語界には無い。落語界では一門であり師匠、大師匠という。最初、このように妙な呼び方を

するのは談志のテレだと多くの人が思った。談志が一門を率いて総帥になる実力があるとは誰も思っていなかったからだが、実はすべて本気だった。自分への買い被りも特技だった。

家元になり弟子に囲まれて「偉い！」「最高！」「世界一！」と持ち上げられ、ついには家元への批判を一切御法度にしてしまった。談志には幸せな世界だったろう。たとえ裸の王様でも。

談志の芸には、こういった「自分が一番」が臭く出ている。聴衆にもそれを強要する。真面目に聞いていない客に高座から文句を言うなど常識以前の話だ。（私も怒られたことがある）。

巧い噺家だと話が進むにつれて噺家が消え、登場人物が見えてくる。そのために落語では座布団に鎮座し、噺家自身がなるべく目立たないようにする。しかし談志の落語では終始談志が消えない。というか消さない。意味不明のハチマキがその象徴。「オレの落語を聴け！どうだ巧いだろう」が談志だった。

絶対に許せないのが、噺の途中でいきなり無言になって考え込み、「この噺はリクツに合わない」などと言い出すこと。客は談志が哲学的思考をしていると想像するが、本当のところはただ噺を忘れただけだろう。高座に掛ける前にしっかりさらっておけば、仮に疑問があれば事前に解決できるし、噺を忘れることもない。自分のミスをトリッキィに誤魔化すのは芸人としての自負も品格も無い証拠。そもそも噺を止めること自体で噺家失格なのだから。

偉そうな態度で他人を馬鹿にしたコメントを連発し、少しウケると天狗になる。自分の欲のために他人を陥れても気にしない。なんともセコい人生が、まさに立川雲国齋だ。